



協議やワークショップのリスク

佐藤修司(教職実践専攻長)

協議の有効性

教職大学院の私に関わる授業では、いくつかビデオを見てもらい、それを元に協議しました。NHKの「プロフェッショナル仕事の流儀」や、学校の研修会用に作られたものもありました。一人で見るだけでも効果はありますが、みんなで一緒に見て協議しあうことはまた違った大きな効果があります。まず、協議でしゃべらないといけませんので、真剣に見て考えることになります。次に、他の人の見方を知り、自分と対比することができます。さらには、現職教員院生と学部卒院生とが同じチームにいますので、それぞれのとらえ方の違いを知り、そこから学ぶことができます。

北九州の教師菊池省三さんのビデオを取り上げた際、協議の中で、菊池さんの実践を高く評価しつつも、「ここまで時間をつぎ込んでやることはできない」「学年として学校としての足並みが乱れる」「チームとして取り組む必要がある」といったような意見も見られました。テレビで取り上げられるほどの人ですが、それだけに目立ちすぎて、学校では浮いた存在になっているかもしれません。ビデオでも他のクラス、教師のことは出てきませんでした。優れた実践、全力の実践が、逆に隣のクラス、教師に負担や不満を生じさせている可能性もあるでしょう。

協議の方向性

ただ、みなさんに考えてほしいことがいくつかあります。第一に、教師の実践の多様性を認める学校であって欲しいということです。程度問題ではありますが、様々な創意工夫が許容され、促進される学校でこそ新しい創造的なものが生まれます。隣のクラスのことを考えてレベルを下げる、自分のやりたいことをガマンするということは本末転倒です。自分が今持てる力の最高のものを子どもに提供することが原則です。そこに手抜

きがあってはなりません。

第二に、みなさんに渡したワークシートにあるように、菊池実践が良いものであるのなら、広げる手立てを考えるべきだということです。「できない理由」を考えるのではなく、菊池実践を、通常の勤務時間内で実現するにはどうすればいいか、学年や学校として全体で取り組むには、また、取り組めるようにするにはどうしたらよいか。そのような前向きな議論を期待したいところです。

第三に、秋田の実践が全国的に評価されているとしても、全国、全世界にはいろいろな実践があることを知り、学び、身につけて欲しいということ、そのことに食欲であって欲しいということです。現状に満足した段階ですでに下降は始まっています。下降に気づいたときには往々にして取り返しがつかないところまで行ってしまっているのです。そうならないためには、常に高みを目指し、変わり続けること、現状への疑問や批判の目を持つこと、探究心を持って、本や雑誌、テレビ等に触れ、研究会・研修会等に参加し、新しいもの、まだ知らないものを求め続けることです。さらにはそれを周りに語り広げ、協議し、よりよいもの、実現できるものにしていくことです。教職大学院と、通常の研修会との違いはそのようなところにもあると考えています。

協議と教職大学院のリスク

注意して欲しいのは、協議すれば必ず成果があるというわけではないことです。参加者が真剣に取り組まず、深く考えもしなければ、ありきたりの結論しか出せず、時間の無駄になることも多々あります。さらに、互いに低めあい、協議しなければよかったということになることもありえます。それは、自由に意見、考えが出し合えない協議であり、多数派や年長者、権威者が牛耳ってし

まうような協議です。そのような場では退化、抑圧、諦めが生じます。そのような協議はやらない方がいいのです。新しい意見、異なった意見、少数の意見、若者の意見から学ぶような謙虚な姿勢がなければ、既存の現状維持的な経験・価値の枠に押しとどめられ、創造や革新は生まれず、さらにはつぶされていきます。

現職教員院生と学部卒院生とがともに学ぶ教職大学院は、学部卒院生が現職教員院生の実践知を学ぶよい機会です。しかし、現職教員院生が既成の枠組みにとらわれ、自分を変えようとする意欲に欠けていれば、その影響は学部卒院生に確実に及んでしまいます。文科省の福島教員養成企画室長補佐が言った、従来の「壁を乗り越えてほしい」「殻を破ってほしい」とはそういうことへの警鐘でしょう。協議も、教職大学院も諸刃の剣(つるぎ)なのです。

ワークショップのリスク

付箋紙を使ったワークショップにも同じようなことが言えます。特定の人ではなく、グループ単位でみんなが気兼ねなく発信し、協議できて、しかもグループごとの発表により全体で共有、協議できること、思い思いに出された付箋紙を模造紙等に貼って動かし、線で囲む、説明を加えるなどして構造化・可視化できることなど、多くの利

点があります。しかし、簡単に形になるだけに、わかったつもりになってしまうことが大きな欠点です。いろんな意見が出た、交流したことで満足してしまい、ものごとの本質が明らかになったのか、明日に向かっての手立て・戦略・計画が明確になったのかがあいまいになったりします。次の回での検証につながらなければ一回限りののでぶつ切れで、線にも面にもなりません。そして、協議の質が、参加者のレベルに大きく規定されることを見えにくくします。

ワークショップの「深さ」を規定するのは、発信の「気軽さ」「活発さ」ではなく、やはり、参加者一人ひとりの力量、眼力なのです。協議はかけ算のような気がします。力量1の人がいくら集まっても1にしかなりません。0.8の人がいれば低下します。1.2の人がいれば向上します。一人ひとりの力量は、読書や研究会、研修会などから得られる、その人の学習の量と質に左右されるのです。その力量を持ち寄るからこそ、ワークショップでみんなが向上するのであって、ワークショップだけで向上するわけではありません。ワークショップの技量を上げること、回数・時間を増やすことよりも重視すべきなのは、学びと振り返りを通じた、普段かつ不断の自己研鑽なのです。

インクルーシブと特別支援教育

藤井 慶博(発達教育・特別支援教育コース長)

我が国における障害のある子どもの教育は、1878(明治11)年に京都に創設された盲啞院から始まりました。それから140年近い年月を経て、現在に至っていますが、戦後の学校教育法施行により、長らく「特殊教育」という制度のもと進められてきました。特殊教育とは障害のある子どもを盲・聾・養護学校(現在の特別支援学校)や小・中学校に設置された特殊学級(現在の特別支援学級)などの特別な指導の場で教育する制度です。この特殊教育制度は、障害の種類や程度によって普通教育と分離しているとの批判に晒されながらも、専門性の維持・向上と、世界的にも高い水準の教育の提供に寄与してきたという側面もありました。

しかし、21世紀に入り大きなうねりが訪れまし

た。2007(平成19)年の「特別支援教育」制度への転換です。この制度転換により、教育基本法には、障害のある者に対する教育の必要性が規定されるとともに、学校教育法にも幼稚園から高等学校にいたるまで、教育上特別な支援を必要とする児童生徒一人一人に対する教育の必要性が明記されました。

この転換と時同じく、世界では「障害者の権利に関する条約」が採択(2006年)され、教育の分野では障害のある子どもと障害のない子どもが共に学ぶといったインクルーシブ教育が推進されることとなりました。

我が国でもインクルーシブ教育の推進に向け、就学においては本人・保護者の意見を最大限尊重するとともに、特別支援学校に就学する程度の子

どもであっても環境を整えば小・中学校への就学が可能になるよう法令が改正されました。また、子どもの教育的ニーズの変化に応じて就学先を柔軟に変更する視点も明確にされました。ソフト面では授業のユニバーサルデザインといった取組が日常的に行われるようになってきています。

このような動向をふまえ、次期学習指導要領では、普通学校における個別の指導計画や個別の教育支援計画の作成が義務化されます。また、高等学校における通級による指導の制度化、2020 オリ・パラを契機とした「心のバリアフリー教育」の推進が掲げられています。さらに法令上保有の義務はない特別支援学級担任の免許保有率を現在の2倍程度にするといった目標値も示されています（現在の保有率は3割程度）。障害者差別解消法も昨年4月から施行され、学校においては

障害にもとづく差別的対応の禁止と合理的配慮の提供が求められています。

これまで長々と述べてきたように、近年急速な勢いで普通学校の学校運営に特別支援教育の視点が求められるようになってきました。しかし、制度が変わっても教職員や子どもたちの意識はどうでしょうか？一人一人の尊厳や多様な生き方・在り方が尊重される共生社会の形成に向け、本学教職大学院の皆さんが幼稚園、小・中学校、高等学校、特別支援学校それぞれのフィールドで、特別支援教育の推進役を担ってほしいと思います。特別支援教育といっても何も特別なことではありません。子ども一人一人のニーズが尊重され、一人として落ちこぼすことのない学校・学級づくりをしてほしい、ただそれだけなのです。

教職大学院フォーラムに参加して

高橋 渉(発達教育・特別支援教育コース学卒1年次)

11月11日(金)に秋田大学教職大学院発足記念フォーラムが開催されました。本学部教職員、学生・院生を中心に、宮城教育大学や弘前大学、福島大学からの参加者も含めて、約150名の参加がありました。

教職大学院発足記念フォーラムは、教職大学院でのこれまでの学びの振り返りと、今後の学びに対する気持ちを新たにできる機会になりました。

文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長補佐の福島哉史氏からは、「教員養成・研修をめぐる国の動向」についての講演がありました。豊富な資料を用いながら大変分かりやすく説明していただきました。また、節々に私たちに対する激励の言葉をいただき、感激と共に教職大学院で学ぶ者に対する期待の大きさを感じました。特に印象に残っているのは、「殻を破ってほしい」という言葉です。学ぶことに対して間違いを恐れる必要はなく、教職大学院生自らがアクティブ・ラーニングを実践していくことが大切なのだという勇気をいただきました。

第二部では、報告者からの「教職大学院の取り組み」での実践報告がありました。報告を通して、これまでの学びや実践を振り返る場になりました。私が経験した「秋田の授業力の継承」の授業（報告：菅原美智、富樫啓太郎）や「岩手教職大

秋田大学教職大学院 発足記念フォーラム

秋田における教育実践知の継承と創造 定員 250名

平成28年4月に秋田大学教職大学院がスタートし、10名の現職教員院生、12名の学部卒業生が学んでいます。教職大学院における取り組みを中心としながら、平成27年12月の教員養成・採用・研修に関する中教審答申を踏まえ、大学院・学部における教員養成と、教育委員会・総合教育センター・学校における教員研修との連携・融合のあり方を探ります。

日時 平成28年 **11/11** [金] 14:40~17:00 (11:10開場)

場所 秋田大学60周年記念ホール 秋田県秋田市手形学園町1番1号

対象 国・公・私立学校教職員、教育委員会、大学関係者、教員志望学生・院生など

開会 14:40
開会挨拶

第1部 14:50~
基調講演 14:50~15:40
「教員養成・研修をめぐる国の政策動向」
福島 哉史氏 文部科学省高等教育局大学振興課 教員養成企画室室長補佐

第2部 15:50~17:00
「秋田大学教職大学院の取り組み」
第一報告 独立行政法人教員研修センター主催講習への参加
第二報告 岩手大学教職大学院との交流及び若手被災地校訪問
第三報告 授業科目「秋田の授業力の継承と発展」の成果発表

閉会 17:00
閉会挨拶

フォーラム当日、大学・教育委員会関係の方には授業の一部公開いたします。なお、教室の関係上、定員は10名までとなります。

10:30~12:00 大学院科目「学校危機管理の現状と課題」
12:50~14:20 学部科目「教職実践演習Ⅱ」
(秋田県総合教育センターとの連携による授業です)

主催 秋田大学教育文化学部・教育学研究科
協賛 秋田県教育委員会 / 秋田市教育委員会
問い合わせ先
秋田大学教育文化学部総務担当
〒010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1
TEL 018-889-2503 FAX 018-833-3049
E-mail: kyosou@jmu.ac.jp

申し込み方法
参加を希望される場合は、11月2日(水)までにE-mail又はFAXにより所定の申込書を発送してください。

秋田大学教職大学院発足記念フォーラムのリーフレット

学院との交流及び岩手被災地校訪問」の研修旅行（報告：門脇恵、岸陽弘）での学びは勿論、現職教員院生が参加した「独立行政法人教員研修センター主催講習」での学び（報告：児玉信子、本多由香、佐々木勝利）から、私たちは様々な機会や、恵まれた環境で学ぶことができていることをあらためて強く感じました。

フォーラムを終えて考えたのは、立場にとらわれることなく、意識を高くもち学ぶことが大切だということです。私たちには教育現場で各々の立場におけるリーダー的役割を担えるようになること、現場に対して新たな「提案や発信」をすることが期待されています。私たちは日々、学びの中でグループ協議や協議内容を全体で共有していますが、それらは全て私たちに求められていることにつながる学びだと考えます。それを自覚し、高い意識をもって今後も学んで行きたいと考えました。このような気持ちを新たにする意味においてもこのフォーラムのもつ意義があると感じました。



【 補 足 】

佐藤修司(教職実践専攻長)

このフォーラムでは四反田素幸理事の開会挨拶に続いて、第一部では文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長補佐である福島哉史氏から基調講演をいただきました。第二部では秋田大学教職大学院の取り組みの概要が報告された後にも福島氏からはコメントをいただきました。教職大学院は文科省として現在最も期待しているところであり、日々の授業において、院生にはこれまでの壁を突破するような積極性が欲しいというアドバイスは、とても大事にすべき点だと感じました。閉会行事では、鎌田信秋秋田県教育庁教育次長、佐藤孝哉秋田市教委教育次長からご挨拶をいただきました。いずれも教職大学院への期待が述べられ、連携をさらに深めていくことが提起されました。

フォーラムに先立って、10:30～12:00 は教職大学院の科目「学校危機管理の理論と実践」を公開し、12:50～14:20 には学部科目「教職発展演習」を公開して、それぞれ6名程度の他大学、教育委員会関係者の方に参観していただきました。「学校危機管理の理論と実践」では大川小学校の事例を取り上げて、検討を行っていました。「教職発展演習」は、秋田県総合教育センターの研修員が自分の実践を学生達に伝える取組を行っていて、この回では道徳の時間の授業づくりが取り上げられました。

近々報告集がまとまる予定です。

平成 28 年度キャリア教育実践研究協議会を終えて

野坂 奨(カリキュラム・授業開発コース学卒1年次)

11月14日に行われたキャリア教育実践研究協議会では、「特色あるキャリア教育の実践」というテーマのもと、様々な学校の実践例が発表されました。その発表の中で私が学んだことや考えたことが大きく2点あります。

1点目は、地域の行事と結びつけた「ふるさと教育を基盤としたキャリア教育」の具体的なモデルです。キャリア教育を推進するためには学校内だけでできることは限られるため、地域や家庭の協力を得ることが必要となりますが、今回発表した学校はいずれも地域のイベントに参加、出店し体験的なキャリア教育の1つのモ

デルでした。一方で考えたことは、物品販売だけがキャリア教育ではないということです。継続的に行うことができるよう、学校の実態に合わせて「キャリア教育」の多様な面を学ばせていくことが必要であると考えます。

2点目は、評価をどのようにしていくのか、という点です。例えば、大館市立西館小学校の実践である「アグリプロジェクト」を行い、その後の評価をどのように見とるのかという部分まで考えて実践されなければならないということです。「活動あって学びなし」とならないよう明確に評価規準を設けて活動を今後生かすこ

とが求められます。そのために、活動前の子どもたちの思いと活動後の思いをまとめる活動を設定するなど計画を立てて先を見通す必要があるのではないのでしょうか。

今回の発表から、これまであまり見えてこな

かった学校における「キャリア教育」がイメージしやすくなりました。私が教員としてキャリア教育を実践する際には、今回の発表の成果と課題を踏まえ、地域や家庭と連携し、推進していきます。

「ふるさと秋田の教育資源とカリキュラム開発」象潟巡検

鎌田 貴文(カリキュラム・授業開発コース学卒1年次)

秋田大学教職大学院では必修科目「ふるさと秋田の教育資源とカリキュラムの開発」の学びの一環として、秋田県にかほ市において地形や産業、歴史を軸にした巡検を行いました。この科目では、子どもたちが自分たちのふるさとへの愛着や誇り、そこで生きようとする意欲を高められるカリキュラムや、そのための教育資源として改めて地域を捉えることを目指しています。本巡検は、そうした視点から地域を見つめるための学びとして行われました。

11月20日に行われた巡検では、それぞれの専門分野をもつ秋田大学の教員が同行しました。ここでは専門の立場から、にかほ市は鳥海山の影響を大きく受けた土地の成り立ちをもち、そこから関わる歴史、産業などを中心にして実地でお話を

伺うことで、にかほ市の魅力を再認識したり、新たに発見したりする機会となりました。とりわけ、鳥海山の山体崩壊や噴火によって生まれた、にかほ市の地形が歴史の歩みや産業の発達にもたらした影響の大きさは、驚きであると同時に大変興味深い内容でした。こうした巡検での学びの過程のなかで、にかほ市に限らない、各地域の魅力を捉える視座を感じ取ることができました。そこで得た視座とは、それまでの地域を捉える視点だけではなく、地学や歴史、産業やそれらのつながりなど、それまでにない新たな視点で地域を見つめ直し、それが子どもたちにどのように響いていくのか、ということだと考えます。ここで得られた地域を見つめ直す視座は、今後のふるさと教育の実践に大きく役立つものであると感じています。

雄和小・中学校訪問から学んだこと

伊藤 智(学校マネジメントコース現職1年次)

11月29日に、教職大学院の授業科目である「学校経営戦略」の一環として、雄和小・中学校を訪問してきました。教育改革の推進に向けた取組の一つである小中一貫教育の制度化が進み、秋田県内においても、小中一貫教育校が設置されるようになり、どのような教育が行われているのか、とても興味がありました。

玄関から入って控え場所の校長室に向かう途中、目に真っ先に飛び込んできたのは、中庭の芝生です。雪が降り始めた11月下旬に緑色に輝く芝生は人工芝で、その中を子どもたちが元気に走り回り遊んでいました。校舎の中も、とても明るくきれいで、素晴らしい環境の中で、子どもたちが学校生活を送っている様子が伺えました。

次に校舎を案内していただき、授業を参観しました。明るく新しい校舎内で授業を受けている子どもたちは、元気いっぱいでした。小学校では、4月から4校が統合したばかりでしたが、みんな仲良く学び合う姿が見られ印象に残りました。また中学校では、ICTを活用した授業がいくつかの教科で見られ、生徒の主体的に学習に取り組む姿勢がとても立派でした。

最後に、学校経営説明及び各指導部説明をしていただきました。開校までの経過やこれまでの成果、課題等について、丁寧に話していただきました。統合したことによって学区が広がり小中でのスクールバスの活用の仕方や、乗り入れ授業や合同行事を行う際の教育課程の編成など、難しい課

題もあり大変さも伝わりましたがそれ以上にメリットの方が大きいと感じました。地域の一体感や協力体制のすばらしさ、また小中間の授業の乗り入れによる専門性や IT による成果、縦のつな

がりを意識した合同運動会など雄和小・中学校のよさをたくさん学ぶことができました。一貫校としての魅力はもちろん、地域の小中連携の在り方を学ぶよい機会となりました。

地域教育行財政の営みから

木 村 司(学校マネジメントコース現職1年次)

地域教育行財政の理論と実践に関連して、秋田県教育委員会を二度訪問し、理論と実践の往還を実感しながらの学習をする機会を得ました。

始めに、実際の教育委員会の審議を拝聴し、地域教育行財政の営みを間近にできたことは有意義でした。審議の内容も多岐にわたり、学校現場と直接つながるものから教育界全般の話題まで広く語られていたと感じました。それに対する事務局側の各課の対応から、様々な教育施策が学校現場と深く関わり合っていることを改めて確認できました。

また教育委員会講座では、義務教育課、高校教育課、特別支援教育課、生涯学習課の各課からこれまでの取り組みや今後の計画についての講話があり、各課の施策における新学習指導要領の動向や予算措置等、学校現場で取り組むにあたって参考になる内容が多くあり、多くの質問等にも対応していただき、より深い学習ができたと感じました。

その中で、今後秋田県に訪れる大量退職時代への施策・対応が興味深かった点です。一概に大量退職とはいえず、それぞれの校種で時期にずれがあり、対応の仕方も違うように感じました。そのため県の施策も多面的な捉えのもとに、施策面、予算面と先を見越したものであることが理解で

きました。教育行財政レベルで行うべきものと学校現場レベルで行うべきものを分けて考えることも必要だと感じました。

今後年長者の割合が下がり、若い教員の割合が増すこととなります。学校で行わなければいけないこととして、若い教員を育てながら学校を機能させていく上で、いかに若い教員を孤立させないかが重要なポイントであることを挙げられていたことが印象的でした。

学校現場では経験の有無にかかわらず、例えばクラスを担任し、分掌を担わされることが普通です。他の職種と比べて、研修を経る等の段階をふまない点で稀有であることは組織マネジメントの分野からも指摘されていることです。自分が若くて、経験も未熟な頃には、多くの先輩の先生方がいて、様々な形でサポートをいただきました。今後はその指導・サポートするべき層も少ない状況になるのです。そんな状況で、いかに若い教員の孤立感を防ぎ、育てていくかは、職務の遂行のみならず、メンタル・ヘルスケアの面でも大事にしたい点であるわけです。

教育界では、教育委員会の在り方等について議論が重ねられていますが、地域教育行財政と学校現場が常に児童生徒のための営みを続けていきたいものだと感じています。

SWOT分析・学校戦略マップ作りを体験して

松 本 深 鈴(カリキュラム・授業開発コース学卒1年次)

今回、「学校・学級経営の現状と課題」の講義の中で、研修に行かれた先生方より、学校組織マネジメントについて教えていただきました。2コマ分にわたり、SWOT分析と学校戦略マップの作成を行いました。正直、新任としての立場で

ある私には、組織マネジメントはまだ早いと思っていましたが、今回の体験を通して、私もしっかり学校組織についてや学校組織の一員である責任を考える必要性を感じるようになりました。2コマとも私にとって少し難しい内容では

ありましたが、チームで行ったり、アドバイスをいただいたりすることで、活動を進めることができました。現場で行うことを考えてみると教職員の思いがお互いに見え、良い組織づくりにつながるのではないかと強く感じました。

1コマ目の授業では、SWOT分析をし、自校の内部的強み(S)、内部的弱み(W)、外部的強み(O)、外部的弱み(T)を書き出しました。そして、理想の学校を目指すためのマップを作成しました。自校がないため、私はなかなかそれぞれの要因を出すことができませんでした。マップ作りでも、何を基準にまとめていけばよいか悩みました。

2コマ目の授業では、班に分かれ、一つの学校の戦略マップを作成しました。これもなかなか難しく感じましたが、班のメンバーと話し合い、いろいろな考えを出し合うことで、まとめていくことができました。自分一人では、創り上げることはできなかつたと思います。このようなことが、現場でも大いに起こるのではないかと感じました。班で創り上げることが学校としてのチームで創り上げることと同じであると考えると、理想とする学校を教職員全員で共通

認識することができると思いました。また、マップ作成の過程で、お互いがいろいろな意見を出すことで、教職員それぞれの思いを知ることができ、より良い学校を目指し、チーム一丸となれると感じました。他の班が作成したマップの発表を聞くと、それぞれの学校の取組や校種の特徴が出ていました。一つの班の発表しか聞くことができませんでしたが、全部の班の発表を聞きたかったです。

今回の活動を通して、学校組織への参画意識をしっかりとつことができました。新任になっても管理職になっても組織の一員であることを忘れずにいきたいです。研修に行かれた先生方ありがとうございました。



「阿仁熊牧場を活用した体験学習」に取り組んで

菅原 郁也(カリキュラム・授業開発コース学卒1年次)



本体験学習は、阿仁熊牧場利活用推進策で提唱された「命の森・学ぶ森」としての活用を推進するために、秋田県から委託された事業です。本学教育文化学部の外池智教授のご指導を頂きつつ、私を含む本教職大学院の学部卒院生6名で取り組みました。活動は、北秋田市立大阿仁小学校の児童たちと共に、全5回の予定で実施しました。そして、活動の様子は秋田放送や秋田朝日放送、

秋田魁新報といった様々なメディアに取り上げられ、本体験学習に対する注目度の高さを感じることができました。

奇しくも昨年の5月から6月にかけて、鹿角市で4の方がクマに襲われ死亡する事件が発生しました。他にも、県内各地でクマが関係したトラブルが目立つ1年だったと感じます。故に、「人間とクマとの共生」という観点から、児童たちにとって本体験学習は貴重な機会になったと考えられます。また、個人的な感想としては、阿仁熊牧場のような地域教材が持っている教育的価値の重要性を再確認できました。今後も、子どもたちが自らの生活経験を活かすことができる地域教材を発掘していきたいです。



教職大学院院生アンケート結果について

佐藤修司(教職実践専攻長)

10月下旬に教職大学院全般に関するアンケートを教職大学院の院生の方に実施しました。その結果と回答について紹介します。

①カリキュラム・時間割、履修・修了要件について

一番多かったのは、教職チャレンジについてで、入学してみて取れない科目が多くあり、免許取得が難しいことがわかった、特に実習日となっている火曜日に科目が履修できない、とのことでした。学部の科目を履修するには、科目等履修生となり、1単位あたり14800円を支払う必要があります。通常の2単位科目は約3万円となります。教職チャレンジは、特例として、この支払いを免除するものです。学部段階で、ある免許を取ろうとして取り残した科目を履修・取得する場合には2年間で可能な場合もありますが、時間割上必要な科目が取れない場合も起きてきます。教員免許を何も有しない場合には、3年間が必要になります。中高免許を持っていて、小学校免許を取る場合も、本来は3年が望ましい在学期間で、兵庫教育大学など、最初から3年を標準履修年限としているところがあります。

昨年までの院生は、修士論文があるとはいえ、30単位取れば修了だったのに対して、教職大学院は、実習を含めて46単位取らなければならないので、かなり大変になっています。さらに、実習が火曜に設定されたことで、火曜の学部科目が取れなくなったことも大きく影響します。以上のことについての認識が足りず、説明がこれまで不十分でした。今後説明を十分に、リーフレットなどにも、免許取得を保証するものではなく、3年以上の在学が必要となる場合があることを付記します。実習の曜日の設定や、学部の免許科目の時間割について、可能な限り見直していくこととしますが、それでも限界があることはご理解ください。

次に多かったのは、授業がある曜日に集中していることや、特に後期一コマ目の授業が多いことへの不満でした。特に大館などの遠方から通う人にとっては、積雪期の通学の問題は深刻です。この点は来年度に向けて改善する予定です、あまり特定の曜日に授業が集中しないようにする予定です。

もう一点理解していただきたいのは、履修単位

の上限制度です。大学院においても、通常、1時間の授業に対して、2時間の事前・事後の学習が行われることを前提として単位が認定されることになっています。2単位の授業であれば90時間の学修が必要で、授業では2時間の15回分で30時間分しかやっていません（正確には90分なので、約23時間分）。その点で、教職大学院は時間割上、かなりの無理をしていることになります。さらに、学部の科目を取って、新たな校種の免許状を取るということは制度的に困難が伴います。

②授業など学習指導について

少人数の学習で、実践と省察を意識した指導がなされていること、今までの自分の指導を振り替える点でよかったなどの意見がある一方で、より、教育現場の今と直結した内容を増やすことや、ゲストティーチャーを増やすこと、電子黒板等のICT関係の機器を使用した授業開発をやって欲しいこと、協議の時間をもっと取ること、内容が盛りだくさんで、内容の精選、時間配分を検討して欲しいこと、終了時刻を守って欲しいこと、各授業で課題が多すぎることで、模擬授業などの課題が別の授業で重なるなどしたので、科目間で調整してほしいこと、授業内容の重なりが科目間であることなどが挙がっていました。

これらについてはFDなどを通じて十分に検討して改善していきます。

また、「多くの教科をとりまとめた科目では、教科、教員によって認識、取り組みが大きく違っていた。教員同士で連絡を密にし、授業の目的や方向性を明確にしてほしい。教材を分析するのか、授業を提案するのか、取り組む活動内容をある程度統一した方がいいのではないか。各教員の担当が3回だけで検討や準備の時間が短く、毎週課題に取り組むのが大変だったので、もう少し担当回数を増やして、課題の負担を軽減してほしい。複数の教科を受講したいと思う人には親切じゃないと感じた。1セクションを3回で終えるのは厳しいと感じた。」との意見もありました。この点も、十分に重く受け止めていきます。

③教職員による日常の指導について(学習指導を除く)

教員にも職員にも大変お世話になっている、学生と教員の距離が近いことに驚く、相談しやすい

という声がある一方で、教員によって差があるとの声もありました。実務家教員の方は居場所もセンターで行きやすいですし、会える機会が多いのに対して、研究者教員は、遠くに研究室がある上に、なかなかつかまらないという不満があるようにも思えます。指導体制、オフィスアワー等について、これも改善をしていきます。

④専攻・コース等のあり方について

「異なるコースでも、院生室の炉端で日々学びが深まっている。控え室が同じであることで、講義後の自主的な振り返りが深まっている。」との声がありました。他方で、現職と学部卒とを同じ部屋にした方がいいとの意見も見られました。来年度に向けて検討します。

カリキュラム・授業開発コースと、発達教育・特別支援教育コースに分かれる必要があるのか、との意見がありましたが、この分け方は全国的に見られるものです。また、特別支援の専修免許状を出す関係でもコースを分けることに合理性があると考えています。

「教科に特化しすぎていたり、専門教科以外を学びたいのに取らせてもらえないような雰囲気が見えたりした」ということについては、科目担

当者間の意思疎通に問題あるようですので、改善を図っていきます。

⑤施設・設備や支援などのあり方について

コピー機、印刷機等の整備、4-111の床の改修への感謝がある一方で、一人一台のパソコン、タブレットの配布などを求める声がありました。予算との兼ね合いもありますが、来年度に向けてアクティブ・ラーニング室を整備し、そこにタブレットを常備することにしていきます。

「模擬授業等で使用する教材教具で、発注が間に合わず個人で準備する場合があった。大学側で準備することを基本とするのか、明確にしてほしい。」との声がありました。基本的に授業で使う教材教具は大学側で準備します。科目担当者が立て替え払いで対応することが可能な場合もありますので、科目担当者に話してみてください。

⑥その他

現職の先生に悩みなどを相談する機会がもっとあればいい、との要望がありましたが、ぜひ臆せず相談するようにしてください。来年度は現職と学部卒とが一緒になるように自習室を配置する予定にしています。

11月～12月の行事等について

- 11月11日(金) 秋田大学教職大学院発足記念フォーラム
第2回教師力向上協議会
- 11月14日(月)・15日(火) 千葉大学教職大学院教員の秋田大学訪問
- 11月20日(日) 「ふるさと秋田の教育資源とカリキュラム開発」象潟巡検
- 11月29日(火) 「学校経営戦略」で雄和小・中学校訪問
- 12月17日(土)・18日(日) 日本教職大学院協会研究大会 早稲田大学
- 12月19日(月) 教職大学院認証評価説明会 アルカディア市ヶ谷

主な行事予定について

- 教職大学院FD
日 時：1月11日(水)
- 岩見三内小学校・中学校訪問
日 時：1月17日(火)
- 教育学研究科第二次入試
日 時：1月21日(土)
- 教育実践研究支援センター・第25回秋田大学教育実践セミナー
日 時：1月28日(土) 13:00～17:00
場 所：秋田大学60周年記念ホール
内 容：「秋田の教育の未来を考えるー学校、学びと学力ー」
基調講演「これからの教育方法・学力・学校を考える」浦野弘教授
特別鼎談「秋田の教育の未来を考える」佐々田亨三由利本荘市教育長
浦野弘教授・佐藤修司教授
- 終了後、浦野教授を囲む会
- 秋田県総合教育センター教育研究発表会
日 時：2月9日(木)・10日(金)
- 模擬授業フェスティバル
日 時：2月16日(木)
- 秋田県総合教育センター連携フォーラム
日 時：2月17日(金)
- 教職大学院第1回教職実践オープンリフレクション
日 時：2月23日(木)